

2019年度GTセミナー 第15回見守る保育リーダー研修② 2019.11.11～11.13

第143号 2019年11月25日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

第15回見守るリーダー研修

2019年11月11日～13日に第15回見守るリーダー研修が
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から90名程の先生方が集まり、武蔵野大学の今福先生の
「赤ちゃんの社会性とことばの発達」についての講演やグループ
ディスカッション等、3日間に渡り研修を行いました。

1日目 2019年11月11日(月)

- 10:00～ 園見学
- 13:30～ 基調講演① 藤森代表
- 15:30～ 休憩
- 15:45～ グループディスカッション
- 17:15～ 意見交換会

2日目 2019年11月12日(火)

- 9:00～ グループディスカッション
- 12:30～ 昼食
- 13:00～ 講演② 「赤ちゃんの社会性とことばの発達」
武蔵野大学講師 今福 理博氏
- 15:00～ 休憩
- 15:15～ まとめ
- 16:00 終了

3日目 2019年11月13日(水)

- 10:00～ 園見学



—社会的ネットワーク—

(前号からの続き) 研修やデータは難しいが一昨日、一般人向けの講演で質問があったのが、「自分の子どもを幼稚園に入れようと思ったが、私の講演を聞いて保育園がいいと思いました」と言ったので、「そんなことはありません。」と言った。幼稚園がいいか、保育園がいいか、家がいいかは、それは場合による。変な親なら預けた方がいい。変な保育園なら、家の方がいいが、どっちがいいかではなくて、変な保育園だったら幼稚園がいいですよ。それはデータでは分からない。出来ることは、どの園もいい園にしようと思います。実際に行ってみてください、入れるからと言って、入れるだけの園に入らないことがあって、難しいが私の園が子ども園になって、一号認定が入るが、一時保育に来ている人が、この園がいいと。だから、うちに入れたいが、うちの面接が今週あるが、先週、幼稚園の入園金のべ切で払い込まないといけない。うちに入れるなら幼稚園に入園金を振り込まないが、落ちたら困るから払わないといけない。発表前に答えるわけにいかない。親は迷っていると言い、うちの一時保育の先生が、「うちに入りたがっているが、どうしましょうかね。来年は面接を早くしたらいいですかね」と言われた。私の妻にその話をしたら、こういわれました。「13万が惜しくて幼稚園に行くなら、行ってもらったら」と言っていた。「それを捨てても、うちに来たい人でいいじゃない」と言われた。いくらうちがいいと言っても、13万が大事なのだと言っていた。今、親信仰が強すぎる、うちでネグレクトの親がいたが、私たちが施設に入れた方がいいと言ったが、親は自分で育てたいからうちに入れたいと言った。何でうちに入れたかったかと言ったら、子供が生涯っぽくて、子どもの障がい者手当は欲しかった。それは覚せい剤を買うために、子どもを見るわけがないので、施設の人と役所の人に来て、話し合わせて、親は泣いて自分が見たい。私たち職員は、施設がいいと言ったら、施設の人に「親子を引き離すつもりですか、冷たい」と言われた。仕方なくうちで預かった。その結果、全て体重を測定して、家で一食も食べさせていないことがわかった。今は虐待でも家に帰してしまう。それはいい親なら絶対いいが、そうでなかったら、そうじゃない優しい人に見てもらった方がいいが、愛着は一緒に面倒を見たり、遊んでいればいいと思われるが、見守る保育の良い方は、愛着の本来の本当のことを言っていると思っている。愛着は、不安に陥ったり、個々に守る存在があるということが愛着です、子どものことを後ろから見ていて、何かあった時に、守る人が居るよということを示すことが愛着です。愛着、アタッチメントの日本語の訳は「見守る」かもしれないと思っています、見ていて、いつでも守る用意が出来ている。一緒に遊んだり、ミルクをあげるから愛着形成が出来るわけではありません。不安な時に行く人を決める。ただし、優先順位はあるが特定の人を決めない。その人が居ないともっと困るから。この時はこの人というような順位がある。皆さん見せたことがあるかもしれないが、こういう動画がありません。男性職員がだめな子どもがいた。その子の動画を見せます。それが父親保育で、全部いるのがお父さんで、その子にとって最悪で、ずっと泣いている。今お見せしたように優先順位なので、この男性職員の優先順位は最下位でした。父親保育の時は、最上位になって、子どもは生きるために愛着存在を必要とすることは確かです、それは時と場合より変えます。一人に決めていたら、赤ちゃんは生きていけません。担当性をやる園では、その先生にしがみつくに決まっています。「ほら、見なさい。他の所に行ったら、落ち着かないでしょ」と言ってしまうが、赤ちゃんはいなければならない時の優先順位を持っている。この時に本当は試したかったのが、知らないお父さんで赤ちゃんは不安。もし、女性の担任がいて、男性とどっちに行くかなと思います。豆まきの鬼が来た時に、泣くときには男性職員

にしがみつく。守ってくれるのはどっちだろうと思うので子どもは生きるために選んでいるのだろうなと思います。

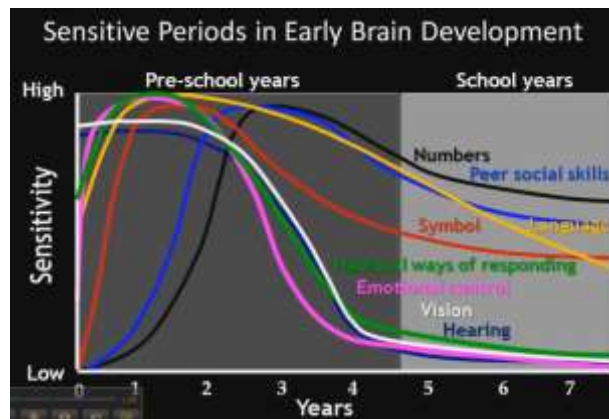
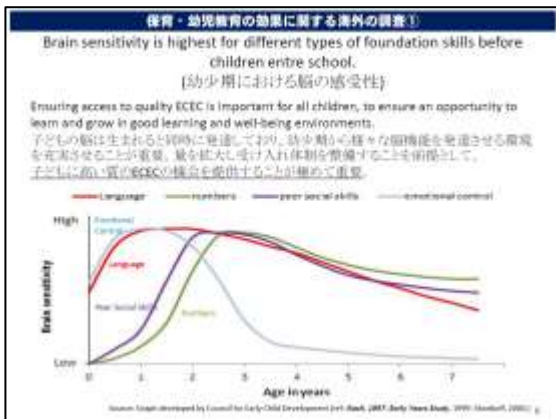
—1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容—

温かく見守るとともに、愛情豊に、応答的に関わる必要がある。

イ人間関係

立ち直る経験や感情をコントロールすることへの気づき等に繋げていけるように援助すること。

指針の中には愛着という言葉は書かれていません。その変わり「見守る」ということが多い、温かく見守ることが、愛着存在で、応答的は求めてきたら受け止めてあげる存在です。それが一つあるが、その次の人間関係の所に、立ち直る経験、感情をコントロールする力と書かれています。立ち直る経験に繋げるように、援助するという事は、先にやってあげてはいけない。最終的に立ち直らないといけない。自分が失敗したりしても、簡単に達成させてはいけない。ここで我慢させる経験もさせていけないといけない。先週、ある園の園内研修で、役所の人に来て、その役所の人担当性にしなさいと言います。担当しなさいというが、情緒の安定よりも、不安定にさせているのは、3対1だと、結局一斉保育をするしかない。探索活動することを止めないといけない。私の考える担当は、場所の担当で、向こうに行ったら、向こうの先生が見ればよいというように、子どもが探索をしたり、色々な先生が見る。1対1で見るとはなく、面で見ると。そういう同じ仲間同士の意識がないとだめ。ということで、立ち直る経験が何で書かれたかという、このグラフです※1。文科省の指針改定で示されました。



—エモーションコントロール—

立ち直る力。これが3歳未満で身に着く。この力をつけるために、1歳以上3歳未満にコントロールをつけましようとする。全員が理解しないといけない。多様性と言って、早く手を出すのではなくて、指針に書かれていることを理解しないといけないことです。先ほどのグラフ、もともとはこのグラフです。このグラフは、エモーションコントロールしかないが、実は3歳以上にいくつかある。これが元のグラフです※2。その他に、ヒアリング、ビジョン、反応する力は3以上ではほとんど伸びない。シンボルやランゲージ。

※1 Graph developed by Council for Early Child Development(ref:Nash,1997;Early Years Study,1999;shonkoff,2000.)

※2 Dr.Clyde Hertzman 出所：<https://www.youtube.com/watch?v=M89VFlk4D-s>

—ピアソーシャルスキル—

社交性。同僚性、同じ年齢同士が徒党を組むので、私の園では2歳だけ年度別になっています。これらが何で大事かという、主な理由、なぜ乳幼児期の発達は大切なのか？包括的な回答として、「その後の人生のチャンスや健康に決定的な影響を与えるから」と言えます。主要な理由として、乳幼児期における脳と生物学的な発達は、重要な一里塚であり、非常に感度が高い時期だからです。就学までに起こる脳の発達内容のラインから見ると、就学時には、その後の人生の成功の基となる非常に多くの基礎の能力が培われていることになります。4歳半時点で将来のものが培われ、人生の成功の基に影響します。

—聞く力・見る力—

脳の感情抑制力と繋がり、先を見通すから今を我慢する。視覚は脳の深い部分と結びつきがあり、感情抑制力とも繋がりがあると言われています。従いまして、子どもは、乳幼児期に多くの人間の顔を見ることによって、幅広いの感情を発達させ神経生物学的な側面の能力を高め、人の気持ちを読み解くことができるようになり、且つ寄贈意識を発達させることが出来るのです。若い人が、共感力がないのは、この時期に昔は担当性と言って、園に預ければ一人の人、家にいるとずっとお母さんで、色々な人の顔を見ないことで、若者になった時に、共感力が育たなくなるのではないかと思います。一方、ネグレクト、暴力的または精神的に苦痛な環境で育った子どもは、全く違った方法で乳幼児期の人生を過ごすことになります。脳内で異なる形での神経生物学上の繋がりができ、それらは決してその後の人生において役立つものになると言えません。虐待を受けたりした子どもはそれを防ぐような脳になり、その脳は人生で役に立たないと言われています。感情コントロールは先を見通す力ですね。

—ランゲージ—

乳幼児期に子どもの言語理解力や表現力が発達する理由は、ひとえに、潤沢で応答的な言語環境で育つことにあると言えます。小学校へ入学するころには、潤沢で応答的な言語環境で育ってきた子どもは、先生の説明を聞き、理解する準備が出来ており、また返答しながら経験を自由に表現し、学ぶことが出来るのです。反対に、言語環境が好ましくなかった子どもは、10語、15語、20語程度の単語が連なる文章を読み解くのにも苦勞し、質問に回答する、自らの経験を表現する、あたかも自分が専門のような口調でアイデアを披露すること等の意義を理解することができません。

—保育の質研究 N I C H D (国立小児保健・人間発達研究所) —

自分が受けたことを人に遣れるようになります。虐待をされても今度は嫌でも人になってしまうということがあります。それから暴力もそうです。暴力的なことを受けると、小学校へ行くと止められますが、実際は困難だと言われています。ですから、いい環境の中で育てないとだめと言われています。そう言うとなんが、どんなことが子どもにとって、いい職員集団かが見えてくると思います。アメリカの質を研究しているところがあるが、いい先生の3つの条件を挙げて、人という環境がいいかが書かれています。「ポジティブな態度を示す」ということを挙げています。

- ・保育者はいつも元気で明るく子どもに接しているか？
- ・保育者はいつも子どもの手助けを親切にしているか？
- ・保育者はいつも子どもにしばしば微笑みかけているか？

同僚としての職員集団については、ディスカッションの中で話してみてください。人材育成の中で、どんな職員集団が、子どもにとっていいのかの部分を抽出して話をしています。私は、保育指針の研修に出ているとかより、子どもに接してあげられる保育者がいい保育者だと思っています。実は中国に行き来をしているが、私が感じているのは、中国で保育者の虐待が増えています。それを失くそうと決まったが、その対策の一つが、ぜひやらないといけないことだが、福岡でありましたが、まず福岡でやろうとするのは研修ですね。私は無理だと思います。良くないことはみんな知っていますよ。中国での虐待は、保育者の資質に問題があり、保護者のクレームと管理職の板挟みで起こしてしまうことが多い。こうしろ、ああしろ、その成果を出すために、強く引っ張ったり、叱ったりしてしまう。色々なことができたりすることが、いいということではないと言わないと、保護者に言わないといけないということで、私たちは保育者の研究も必要だが、親に何がいいかを伝えないといけない。私たちはどんな人材育成かは、どんなに多様性と言っても、基本的なこと、いけないことはいけないです。だけど、そうじゃないところは仲良く、私たちが折れることが必要なところもあると思います。一つは子どもにとってということで、それぞれが同じ山を目指します。登って頂上に着いた時、Aさんはあっちの山にいたらまずい。だからと言って、山を登る道はそれぞれでいいと思います。花が好きな人は、いっぱい咲いているところでもいいでしょうし、景色が見たければ、それでいいでしょうが、好きな山に登ってもいいというのはおかしい。最近、ラグビーで有名になったのがワンチーム。だからと言って、全員が同じことをするわけではなく、それぞれの役目をします。以前は、野球型からサッカー型と言っていたが、今はラグビー型と言った方がいいかもしれませんね。ワンチームで一つの考えを目指すけど、攻め方などはそれぞれのやり方がある。私たち管理職が示さないといけないのは、どの山を目指すか。それは、どんな理念でするかをきちんと目指すべき。うまくいかないのは、管理職が山を示さないのに道ばかりを文句を言う。そっちの道はダメというが、山を示して道は任せるべきです。私の園で、運動会の後に若い人にこういった。運動会があると、前例のように、次の年に引き継ぐが、入場門と退場門があるが、これが伝統だと思ったら大間違い。うちはある年定員を1.5倍に増やされたが、そうすると一部屋が学童がなくなり、一部屋が空いただけなのに、すべてが1.5倍になる。靴箱も1.5倍になる中で、運動会は特に1人ずつ見せるので、1.5倍の時間もかかり、どうしようと思直した結果、入場門だけがあって、そこから出ていたのが、終わったら退場するのと同時に入ってくることで時間短縮をした。その時々を考えていることなのです。今年したから来年もすることはしない。来年はどんな状況下で、変える力がないとだめ。台風もいつ来るか分からないことがあると、時期を考え直さないといけないとか、場所を考えないといけない。天を恨んでも仕方ない。その中で何がベストか、親はいろいろ言うが、苦情も当てにならないことがわかった。私の娘が結婚して友達に会って話をした時に、友達がやたらと自分の園自慢をしていたらしい。特に運動会がいいと。

「園の名前は分からないけど、園長が藤森と言ったらしい」と言ったそうで、どうやら職員が言うには、一番苦情を言っている親が、外でやたら褒めているから当てにならない。変えていかないといいないが、変える時にはいろいろ言われる。子どもにとって何が一番いいかを崩さないこと。その時々を考える。若い人の貴重な意見ですよ。今まで、こうしてきたとベテランは思っています。経験者が大事だと思うのは、その中で方法ではなくて、どの山を目指すかを知っているのはベテランです。運動会で何をすべきかに戻るのは出来る。若い人の意見をどうやって、実現できるかを考えるのがベテランで、若い人の意見を取り入れて、何をしたいかを押さえること。これが民主主義だと思います。

—参画—

ある男性が民主主義について、多数決はどう思うかを聞かれた。その男性は、少数意見で認めてもらえない不満があって私に聞いてきた。私は、ドイツは参画と言って、行事に参画させる。今までは参加で、大人が決めたことに加わることだったが、参画は計画自体にも子どもが関わる。これからは、子どもの参画、保護者・地域の参画が課題になってくると思います。ドイツでは参画がテーマになっていて、ある園が遠足を決める時に候補を子どもたちに出させた。それを階段の踊り場に張っておいて、通るたびに投票をして一番多い所に行く。多様性が言われていますが、実際に園の中ではそうは言っていない。1つに決めないといけない。遠足はどこがいいか。山が良いか、川がいいか。「山が8割だったので、山にしましょう」は従来の決め方で、川が良いという人に「何で川がいいの?」「子どもが川に触れる体験が大切だから」と少数でも、ちゃんと意見を聞いて、それを実現するようにする。水に触るなら、山の人は我慢しないといけないこともある。OECDが2030年に向かって必要な力の2つ目に、「対立とジレンマを乗り越える力」が挙げられています。多くの国々の中では、ジレンマがあり、乗り越えて合意する。それぞれがいいねと言っていない。それぞれが合意する。ジレンマもストレスもあるが、チーム保育や異年齢をするときに、自分がやりたいことを我慢することもある。どこか散歩行こうと言ったら、意見が割れますよ。だったら、クラス別で行こうとなる。それは結局大人の都合。それを乗り越えて、共通の物を見つけていかないと行けない。EUは考え方を1つにするだけでなく、裕福な国はそうじゃないところにお金を回さないといけなくなり、だったらといってイギリスが抜けようとしている。アメリカだったら、アメリカさえ良ければいいというが、それぞれの国に文化があり、それを調整して、合意していくことを見つけていかないと行けない。文化が違って、それを認めて、やっつけるのはよくない。私に聞いてきた男性に、「民主主義は、君たちが考えている多様性は間違っている。多様性は、それぞれがいいねというのは、それぞれの文化を大事にすることだけど、それぞれが別々にやることではない。当然、我慢しないといけないことがある。」とすることを言いました。もう1つ若い人の欠点が、話す力は学んだけど、聞く力が出来ていないと言った。みんなの前で発表することは学校で勉強するが、自分の考えを言った途端。もう他のことをして人の話を聞かない。では、聞く力は黙って聞けばいいかと言ったらそうではなくて、人の言ったことを、自分の考えにプラスできることが聞く力です。自分の考えを言って終わりということで、一時期、ディベートが流行ったが、例としてよく話すのが、話し合いは、子どもたちにお道具箱からクレヨン1本持ってきなさい。それを隣の人と交換すると一本。それを頭の中で冬が近づいて来たね、1つだけ考えなさい。それを交換すると頭の中に2つになる。自分の考えに人の考えを足すことが聞く力です。ディベートは交換どころか、クレヨンを折ってしまう。持っているものを大事にすることだと思う。職会でも、話し合いで足されていかないと行けない。白熱教室でこんなことをやっていました。「今度コンサートしよう!」というと「嫌だよ」その後、ちゃんと理由を言います。「コンサートに合わせて、一緒にお笑いしようよ!」「嫌だよ」と足して行って理由を言うけど、最後やるのを、やめようとなる。逆に肯定して足していく。「今度コンサートをやるよ!」「良いね、お笑いもやったら!」と足していくと、立派なものになる。話し合いはそういうもので、相手を否定したり、やっつけることではなくて、足していくといいものになる。ですから、若い人が言ってきたことに対して「それいいね、こうしたらもっといいんじゃない?」ということです。出来る限り、私はそういう風になっているつもりです。今度、お楽しみ会があって、原案が出ると、「それいいんじゃない、こうしたらもっといいんじゃない?」という意見を入れるようにしています。最終的全く違うものになるかもしれないが、最初から否定するのではなく、その気持ちを受け止めて足していく。そういうことが、同僚性の中でとても大事なことになると思います。その中で行き詰った時に原則に戻る。今言われている子どもの権利条約、子どもの最善の利益を守ることですね。指針や園の理念とか、最近、汐見先生の講演なんかで

は、一時期、非認知能力と言っていたが、きちんと園が理念を持つことと言っている。それは迷った時に、目指す山を見つけることだと思います。麴町中学の工藤先生が言っているが、よく目的と手段を間違ってしまう。何をしたいのかではなくて、何をするのが先になってしまう。手段を先に思ってしまうが、目的をきちんと見直さないといけない。方法ではないですね。そういうように、話し合う時に帰るべき道です。そういう中では、園の理念に元気な子とあるが、それは理念ではなく、一つの方法かもしれないが、どんな人間像をめざすのか。それが教育で書かれているのが、健康で平和で、民主的な社会の一員となることが書かれています。私たちが最終的にするのは、平和な世界に子どもたちに渡したいということをしました。知識を得たって、人と話せないと意味がないですね。得た知識を、平和なものに使ってもらいたいと思います。親に言われて、いちいち、ぶれたても仕方ない。ただし、方法はそれぞれの考え方でいいし、保護者なら保護者から見た考え方でいいし、自分たちを頑なに守ることは必要ないと思います。うちの園を見学して、そっくり真似をする必要はありませんが、いいものはいいものとして、うちが何で用意してあるか、何のためにやっているかを見てもらって、自分の園ならどうするかを職員同士話し合うこと、目的をきちんと示せばリーダーだと思います。ぜひ、そういうことを学んで帰ってもらえたらと思います。私からの話は以上になります、ありがとうございました。

本稿は、2019年11月11日に行われた第15回見守るリーダー研修の講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。